



▲乱歩賞授与式。松本清張(右)から記念品を授与される



▲乱歩賞記念シャーロック・ホームズ像(左)と受賞祝賀会芳名録(右)。森村誠一、佐野洋、中島河太郎らの名前が見える

りましたが、夢破れたことで小林の人生に転機が訪れます。

プロデューサーとして、映画の題材を求めて推理小説を読みあさっていた小林は、やがて『推理界』などの雑誌に推理小説時評を書き始めます。その後、編集者の勧めから自身も小説執筆に手を染め、昭和45年3月、「零号試写室」を『推理界』に発表、作家デビューを果たしたのです。昭和47年には冬木鋭介の筆名による「腐蝕色彩」でサンデー毎日新人賞を受賞。そして昭和49年、足尾鉍毒事件にゆれる谷中村を舞台にした社会性豊かな歴史推理小説『暗黒告知』で第20回江戸川乱歩賞を受賞しました。

ちなみに、授賞式のプレゼンターは松本清張でした。上掲の写真はその時のものですが、社会派推理の生みの親と、その系譜に連なろうとしている新進作家を写した、何とも象徴的な写真ではないでしょうか。

社会派ミステリーの鬼才

推理作家としての地歩を固めた小林は、これ以後、原稿用紙をフィルムの代わりにして、常に弱者の視点から社会の奥底に潜む権力悪を暴く作品を世に送り出していきます。

『黒衣の映画祭』『零の戒厳令』『空を飛ぶ柩』『灼熱の遮断線』『裂けた箱舟』『皇帝のいない八月』『父と子の炎』など、特異な発想と重厚な展開、そして映画界出身らしい繊細な描写を駆使した秀作を次々と発表、推理文壇に一時代を画しました。その質・量とも

に圧倒的な活躍ぶりは、まさに社会派ミステリーの鬼才と呼ぶに相応しいものでした。

ふるさとへの思い

ところで、小林久三は『むくろ草紙』『火の鈴』『帝都発幻影列車』『一億円の手錠』『真夏の妖雪』など、古河を舞台とした作品を多く描いています。北関東の小都市をあえて舞台に選ぶ……そこには故郷への強い思い入れをかいま見ることができます。

さて、話はちょっと先になりますが、文学館では10月29日(土)から、企画展「没後10年 小林久三展～社会派ミステリーの鬼才～」を開催します。自筆原稿や賞牌類など数々の資料で、郷土ゆかりの作家の生涯をたどる回顧展です。ぜひ、ご高覧ください。

古河文学館学芸員 秋澤正之



▲サンデー毎日新人賞記念時計(左)と角川小説賞記念ブロンズ像(右：『父と子の炎』で受賞)

※次号(平成28年10月号)は休載します。